

泉鏡花と森田思軒

手塚昌行

一

泉鏡花が森田思軒の文学に接した最初は明治二十年のことであった。その年の一月十八日より郵便報知新聞に連載された「嘉坡通信報知叢談」の一つ『金驢譚』（紀元二世紀のアフリカのマドウラの人アブレイアスの「黄金の驢馬」の抄訳）柳田泉著『明治初期の翻訳文学』がその読み初めである。鏡花は作中の主人公に自分を置きかえてしばしの幻想にふける程の熱中ぶりであった。ついで同年九月十六日からのやはり嘉坡通信報知叢談にあった『盲目使者』（ジュール・ヴェルヌ）にも心をうばわれ、彼は「是はまた飛放れて面白（註）いので、ここで新聞で小説を読むことを覚えた」と述懐している。

それ以前の彼の読書歴は草双紙が主で、次にそれで得た文学への興味を土台として『呉越軍談』『水滸伝』『三国誌』などの硬派の文学へと進み、それらを愛読するという状態であった。彼は当時の読書について回想した『いろ抜ひ』（明三四・二「新小説」、大七・六『鏡花隨筆』所収）で「関羽の青竜刀、張飛の蛇矛など

が嬉しくって堪らない」と述べている。そしてその頃思軒を発見したのであるが、私はこれらの読本の文体が和漢混淆と雅俗折衷のまざったものであることに注意したい。何故ならば、これが思軒への橋渡しを一そう容易なものにしたと考えられるからである。

今文例について一例をあげるならば、『呉越軍談』の、そも／＼鏡花をしてこういった硬いものに引き入れさせた端緒となったくだり、即ち、伍子胥が秦の衷公の催す会で大氣焰を吐く場面は左の如く記されている。

秦の衷公。元来小事たりとも。失あらばこれを罰して。諸侯に威を示し。權を執て衆侯を従へしめん結構なるを。子胥の直言に黙思なせしが。子胥に向ひ。明輔の辭説て理あり。しからば楚国は乃ち千乗の国。地富民殷にして亦奚宝なしとするや。伍子胥こたへて。吾楚国もつて宝とするなし。惟善を以て宝とす。衷公顔色を動かして曰。楚の武王郢を滅してより以来。莊王覇を繼で威を中国に震ひ。東を蕩し西を除き。荆喪を倒し。人の国家を奪ひ。宗祀を覆すこと其員をし

らず。強暴たとふるに比倫なし何を以て善とするや。

思軒の訳は所謂周密文体というもので、これは西洋的の表現をした直訳風の文章体であった。故に『呉越軍談』、『三国志』等や思軒の訳文の間には文体がかもす共通の雰囲気があり、すでに上述の諸作品によつて漢文的雰囲気には慣れ、あまつさえ強い文学的興味を持っていた鏡花は、初めて思軒の訳文に接した時にも、何ら抵抗を感じぬのみか親近感さえ持つことができたであらう。特に『盲目使者』は完成された周密文体の好模範とは言えないが、なか／＼の名訳であると評された作品である。(柳田泉著『明治初期の翻訳文学』)『金鑪譚』の面白い幻想性といい、『盲目使者』の興味津津たる内容と相まつての名訳といい、勿論偶然ではあるが、鏡花と思軒の出会いの条件は、鏡花の文学にとってまことに好運なものであった。

これら思軒の発見は鏡花十五才の少年時代で、紅葉を知る二年前のことである。即ち明治二十二年紅葉の『二人比丘尼色懺悔』に魅せられるまでに、すでに以上のような、鏡花の胸中に文学というものを教へこむのに役立っていた思軒との関係があったのである。

さて、鏡花の思軒愛読は既述の二作を出発点としてその後もずっと続いていた。それは鏡花自身の次の言葉で理解できる。

「思軒は、あの頃の若い者はみんな喜んで読みましたネ。読むことが一つはミエなんです。」(村松定孝著『泉鏡花』)

又、彼は少青年時代に思軒をほとんど暗記するほどであったとも伝えられている。(村松定孝『泉鏡花・里見淳の文体』)『国文

学』第五卷第六号)

故に鏡花の場合はミエでなく真に愛読したことがわかる。

だいたい紅葉の所にいた頃を中心としてその後、鏡花が読んだと思はれる思軒のもので、翻訳はヴィクトル・ユゴーの『随見録』(明治二十一年)、『探偵ユーベル』(同二十二年)、『クラウド』(同二十三年)、『懐旧』(同二十五年)、『死刑前の六時間』(同二十九年)等で、他に『社会の罪』(同二十四年)と題する随筆があげられるであらう。いずれも思軒一流の周密文体で書かれたものであった。

紅葉は鏡花の持つて来る原稿の誤字や部分的な表現を直したり、鏡花に彼自身の原稿を浄書させたりすることによつて語彙を豊富にすべくしつけたらしい。だから鏡花は文体においては自由であった。自分の好きな文体で小説を書いては紅葉に提出したと思われる。そこで鏡花は彼が少年時代より暗記する程愛読した思軒をここに模倣したのである。こうしてまず思軒の影響は初期の鏡花文学の文体にあらわれてくる。

即ち『活人形』(明二十六)、『金時計』(同)あたりから『海城発電』(明二九)に至る明治二八、九年頃までの諸作品には、濃淡の差こそあれいずれも思軒流の周密文体的な筆致が認められると思う。例えば次の如くである。

然れば金城に血ある者、すたんでんの所業を以て、各自の面目を汚せりと為し、憤慨すること一方ならず、罪を地方官に訴へむか、治外法権の制あるを奈何せむ、如かず之を道義に責めて、社会の制裁を行はむにはと、北国の新聞は幾多の同

胞を代表して、紙上に喋々其罪を論ぜり。

(明二七『大和心』)

千代太は固より然かすることの、父を見ま欲しき願に對して、何等の益も無きを了せり。知りつゝもなほこれを罷め能はざるは、人が其亡父母の墓前に跪くや、尊靈我とゝもに存して慰め給ふ心地すると奮しく、千代太も亦父が彼処に在りぞと思ふめる海の果を見晴す間は聊か衰さを忘るればなり。

(明二七『海戦の余波』)

次は『夜行巡査』と『外科室』であるが、これらの作品は、後述するように思軒の訳文の文体に特に負うているものであるから、地の文章の思軒調の跡は量質ともに最高潮に達し、そしてそれはなおその後の作品にも及んでいるのである。目につくまま挙げてみよう。

公使館の辺を行く其怪獣は八田義延といふ巡査なり。渠は明治二十七年十二月十日の午後零時を以て某町の交番を發し、一時間交替の巡回の速に就けるなりき。其歩行や、此巡査には一定の法則ありて存するが如く、晚からず、早からず、着々歩を進めて路を行くに、身体は屹として立ちて左右に寸毫も傾かず、決然自若たる態度には一種犯すべからざる威厳を備へつ。制帽の庇の下に物凄く潜める眼光は、機敏と鋭利と酸醜とを混じたる、異様の光に輝けり。

(明二八『夜行巡査』)

実は好奇心の故に、然れども予は予が画師たるを利器として、兎も角も口実を設けつゝ、予と兄弟もただならざる医学

士高峰を強ひて、其の日東京府下の一病院に於て、渠が刀を下すべき、貴船伯爵夫人の手術をば予をして見せしむることを余儀なくしたり。

(明二八『外科医』)

さて、鏡花は以上の例において見る如く諸作品の地の文を周密文体的にしたと同時に、技巧上においても思軒訳のくせともいふべき、つまり訳文としてあらわれた場合、所謂思軒調を構成している一つの特色をさらに拡大強化して使用することによって、その文学的效果をより大ならしめることにつとめている。それが内容文体と相俟つて最も成功した作品が『夜行巡査』、『外科医』であらう。

その技巧上の影響点とは、鏡花が初期の小説に、換言すれば思軒の文体を使用した作品に多くみられる呼びかけの表現、乃至は疑問提起の筆法、さらに思軒がその訳文の末尾を独特の「結尾冷鉄の一句」を以て表現した効果的使用である。

この技巧は思軒の訳文においてその性質から二種類に分けることができる。第一類はたんに文章上の技巧として文中随意の所に使用されているもの、第二類は一篇のしめくりのため結論として、その読者に訴えんとするところの問題を改めて提起したものである。そしていずれも思軒文では成功している。

代表的なものを挙げれば、第一類に属するものとしては例えば『盲目使者』で、脇役ではあるがなかなか重要な役目をする徐夫と武良温という二人の新聞記者が、互にしのぎをけつて汽車中より見た露国の情景をそれぞれの本国へ知らせる所がある。これは一篇を流れる緊張感を一寸緩和するために時々設けられたくだ

りの一つであるが、しばらく二人の活躍を滑稽味を交えつつ叙したる後、

嗚呼世人は浴道の諸地を精密に説きたる徐夫の通信を読まんと欲する歟。浴道の模様は唯だ「山統き」と云へる一事より外知る可からざる武良温の通信を読まんと欲する歟と問いかけて、がらりと主人公蘇朗笏が美女那貞に出会う次の場面に読者を誘ひこむあたりの緩急の呼吸の巧みさは、もとより原作にその運びあるとしても、この詠歎的な呼びかけの表現の効果的使用によるところ大である。

又、『クラウド』においても主人公クラウドが薄情なる看守をたまりかねて殺害し、同時に自らも命を絶たんとした章の最後を、

他の一人は即ち己れなりき。クラウドは其妻の刺刀を取り出して己れの胸に刺したるが、刃は短かく胸は深ければ死するまでに傷くる能はず、遂に血に塗れたるまま看守の屍の上に果なり伏せり。

兩個の孰れを以て是れ殺されたる者と目すべきにや。

と結んでいるが、これも同様な手法であらう。

さらにこの作品は、最後の一章全体に上述の第一類第二類の場合に属する技巧を駆使して終らせていると言っても過言ではなく、そしてこれもまた的確なる効果を充分にあげているのである。即ち、

造化が一個人に賦したる所のものは願くは社会をして之を成就せしめたし、請ふクラウドを見よ一個の敏明至深の人物な

り、而して惡境界の中に入れられたるが為め渠は遂に盜となれり。社会は之を監獄に投ぜり。而して監獄の内の惡は更らに大にして渠を殺人者とならしむるに終れり。

余輩が実に責むべきは渠にある歟將た我々にある歟是れ深長なる思慮を要すべき所なり。云々。

という箇所がそれである。

思軒も訳し来つてここに至り、感動に胸の高鳴りを禁じ得なかつたのであらう、わざわざ一卷の訳了後に彼の評をつらねて、「結尾冷鉄の一句原文に就て之を読めば覺えず悚然たるものあり。(中略)今ま先生の演説を見れば、此の世界を挙げて黄金世界となすも甚だ難からざるに似たり。蓋し大人偉君子が道を見得て極明極白なる乃ち其言の透徹空濶なること此の如し。」と述べている。

この呼びかけの問題提起の表現は、それが第一類第二類いずれの形にしる一篇の主題を強調するのに非常に有効な技巧であつた。そこで思軒自身も明治二十四年五月「國民之友」に發表した隨筆『社会の罪』では、第二類の形で使用している。思うに『クラウド』から思軒が強い印象を受けたためではなからうか。

即ち「恋を写す固より小説なり貧を写す固より小説なり今の小説家が之に相憐の情を表して極力之を描くは亦た固より宜べなり」ではじまる最後の一段がそれで、思軒は時世の推移よりおこつた人間の不幸を述べて、

而して其人は誠実有道の君子也此の如きに相憐むに足らざる乎之に相憐の情を表して歴史と社会とが濺がざるのを涙を濺

くは亦た小説家の一徳にあらざる乎今の小説家其れ此に意有るもの無き乎と筆をおいている。

私はさきに鏡花が読んだ思軒の文章のうちにこの『社会の罪』をあげたが、後述するように観念小説期の鏡花の小説には屢々社会の罪を高唱する態度があるところからみても、鏡花にとって右の一文はまさに「結尾冷鉄の一句」であったと思われる、その感動の程が容易に察せられるのである。

さて鏡花は思軒の文章からこのような技巧の影響を受けたのであるが、その中で最も顯著な例は、『外科医』の末句、

語を寄す天下の宗教家、渠等二人は罪惡ありて天に行くことを得ざるべきか。

であろう。田岡嶺雲は勿語小説全体の觀察の上にたつてであったがこの末句には特に心を打たれたらしく、『外科室』を賞讃して鏡花に観念小説作家の称号を与えた。そしてそれ以後の研究者はほとんどがこの末句に幻惑されてしまったかの感さえある。

同じく『夜行巡査』でも終末を、

後日社会は一般に八田巡査を仁なりと称せり。あゝ果して仁なりや。然も一人の渠忍苛酷にして、恕すべき老車夫を懲罰し、憐むべき母と子を厳責したりし尽瘁を、讚歎するもの無きはいかん。

のように呼びかけの表現で結んでいる。

これら二作の文体について作者鏡花は、「思軒の翻訳物によるところが多かったように記憶している。」と言っているが（村松

定孝著『泉鏡花』）、そのことから、以上述べ来たように鏡花が文章及び技巧において積極的に思軒調を模倣したことが実証されると思う。

ここで注意すべきことは、「結尾冷鉄の一句」の効果が、嶺雲の讃辞以来あまりにも有名になったため『夜行巡査』と、『外科室』についてのみ多く語られ、その外の同じ手法を使った作品はほとんど黙視されてしまっていることである。たしかに『夜行巡査』や『外科室』などは、内容が単刀直入的であり思軒文体の模倣も手なれてうまくなったため、読者の共感を得るに充分であったのであるが、すでにその技巧はそれより一年前の明治二十七年作『鐘声夜半録』の結尾の、

読者如他日子が死を聞かれなば、直ちにハレスが存亡を問はれよ。同月同日同所に於て醜虜も同時に死すべきなり。

においてみられる。村松定孝氏は『泉鏡花』の中でその点を指摘され、この「呼びかけの表現は、翌二十八年観念小説として文壇に迎へられる『夜行巡査』『外科室』或いは『化銀杏』等に用ひられてゐる手法を夙に具現してゐるものといへよう。」と説かれているが、その外にもこれに類するものとして同年には十一月発表の『譬喩談』十二月発表の『鬼の角』の二作がある。

まず『譬喩談』について考察すると、これは内容が滑稽味のあるもののためか思軒の文体は些かうすれている。しかし最後に至って思軒の技巧をかなり長く用いている興味ある作品である。即ち問題提起、そして教訓をふくんだその解答という順に第二類の技巧が使われているのである。われわれはこの形を『クラウド』の

本章において見ることが出来る。『譬喩談』では、「然り、人生何かよく如意なるべき。」以下最後までがそれであるが、しかし問うている内容は『クラウド』とは全く違う。『クラウド』は要するに社会には個人を悪くする種々考えねばならぬ問題があり、その解決にキリスト教の信仰の必要をといっているのであるが、『譬喩談』では人生不如意なるが故にいたずらなる強慾をいましめ適當の節欲の要を述べている。

以上のことから、私はこの『譬喩談』の成立に関し次のような意見を持つ。

この作品は紅葉の訓戒に対する謝罪の心がその動機にあったのではなからうか。即ち、明治二十七年一月九日父が没したため鏡花は金沢に帰ったが、その時の泉家は極貧の状態で明日の米塩の料も尽きること度々という有様であった。そのため彼は苦しみのあまりしばしば自殺の意を生じ且つ決心したことがあった。その煩悶の中に『鐘声夜半録』が成り、東京に郵送して紅葉の校閲を乞うた。それに対し、主人公豊島の一死を喜ぶ精神病者のような感情から、貧乏のために心を攪乱された鏡花を知った紅葉は、「さほど貧乏が苦しくば安ぞ其始彫闔錦張の中に生れ来らざりし。破壁断軒の下に生を享けてパンを咬み水を飲む身も天ならずや。其天を来め！」（明二七・五・九書簡）と激励叱咤した。鏡花はこれに対して後で心機立ちどころに一転することができたと述懐しているが、紅葉へ、師の一言により悪夢からさめこのように立直ったところをみせて、あくなき慾をいましめる小説を書き、更に思軒の技巧を駆使して、「結尾冷鉄の一句」を用意

し、紅葉に対しての感謝の意と安心を乞う氣持をこめたのではなからうか。

又、少年読物『鬼の角』の結尾は、

見よ、老人が其本性に帰着せしは、鬼の角を棄てしに因るを。ここに筆を擱きて、漫に鬼神を説けるを謝す。幼年諸子、諸子また読過一遍の後は、此鬼の角を匣底に棄てて、更に机上の經典を繙け。

を以て終るのであるが、このような説教的な結末を用意したことは、鏡花が残虐的な描写をしたため少年という読者層を考へてのことであらうが、これは思軒調技巧第二類に入れてよいものだと思ふ。

なお、この小説において鏡花が少年達に經典を読むことをすすめている点であるが、ユーゴーは、「善く記せよ社会にはコムベールマンシェウより更らに大切に憲法より更らに広く悦ばれ一千八百三十年の法券よりも更らに重んじ読むべきの書あることを即ち經典なり」（思軒訳）と、しきりに人々に經典を読むことをすすめる、なおも語をついで、「經典を有らゆる村々に布き家として經典を備へざるはなきに至らしめよ」（同上）と呼びかけている。思軒は上にみるようにバイブルを訳して「經典」と書きそや仮名をつけているが、鏡花亦然りなのは面白い。鏡花はクリスチャンではないから彼が使用した經典という言葉を厳密なる聖書の意味にとることは或いは間違いで、一切の人間修養上の聖典を經典で代表せしめたのであらう。しかし言葉の使用法、その読ませ方の方の同一な点、又鏡花が『クラウド』を読んでいた点からして、この

時鏡花の脳裡に思軒訳『クラウド』の結句が想起されたのではなからうか。又、そうしたことが自然と思える程、思軒調の技巧の効果は、鏡花の胸中に深くしみこんでいたであらうと思う。

以上のように、鏡花初期の文章に認められる大きな影響の一つに思軒があったことは、やがて師紅葉も気づいたと思われる。思軒風は同時に非紅葉風ということの意味している。宗教的な程紅葉に師事し、紅葉も「俺の御馬前で討死するのは鏡花位のものだ」などと大いに満足していた二人の間柄であったが、鏡花は黙々と自分の好む文体で小説を書いていった。或いは師匠の文体を模倣することは勿体ないと考えたのかもしれないが、それにしてもあまりにも思軒の跡が認められはしないだろうか。実は鏡花は『色懺悔』よりも『風流京人形』よりも、少年時代毎日毎日北陸英和学校の談話室に行つては読んだ思軒の翻訳に、そして文学を志してからも接しつづけていた思軒の数々の作品に共鳴し感動するものがあつたのではなからうか。

徳田秋声のちに、鏡花の芸術或いは文章はむしろ紅葉のものと相容れないもので鏡花が紅葉を大切にしたのも裏切者になりにくくなかつたからではないかというようなことを言っている。

(諸家『明治大正文豪研究』新潮社)

この裏切者説はしばらくおくとしても、自分を観世音同様に信仰していると思つていた鏡花、そして自分もそれに報いるように熱心に指導してやっていた鏡花、その鏡花の文章に、実は自分よりももっと強い外的影響力が働いていたことを知った時の紅葉は、さぞさびしい不満を感じたことであらう。そんな時ではある

まいか、紅葉は秋声に「泉の文章は邪道だ」とひそかに告げたということである。

紅葉門に居て、しかも第一の弟子ぶりを發揮しつつ又同時にしきりに師紅葉的ではない他人の思軒調の文章を書いていた鏡花。この事は鏡花の文体研究をはなれても、彼の人間を探究する上に興味深い示唆をふくんでいると思われる。

二

次に思軒の影響が指摘できるのは、その思想及び翻訳の内容的方面においてである。

鏡花が文壇の脚光を浴びる原因となつた『夜行巡査』、『外科室』の二作は、いずれも地の文章と技巧に思軒があることはすでに考察したが、内容上からみて『夜行巡査』は三つの点で思軒の思想とその翻訳の内容からの影響が考えられる。

その第一は『夜行巡査』には、職務のために自分の個人的幸福を死によつて犠牲にする一人の人間が描かれているが、鏡花の目はその主人公八田巡査を通して、人間の機械化を要求する無慈悲な社会の姿を見つめていた。

この鏡花の着眼は、すでに柳田泉博士が指摘された如く思軒の『社会の罪』の思想に由来するものと考ええる。(『古い規程から』)

Ⅱ『文学』第二十八卷第七号)

『社会の罪』の思想とは、要するに誠実有道の君子で時世の変遷におちる者が多い、世人はこの人々をただ頑愚として笑うだけだが、むしろ彼等に相憐の涙をそそぐべきだ、というのである。

柳田泉博士は、「人間には人間の罪があるが社会には社会の罪がある。それで人間を論ずるには社会から見てかからなくてはならぬ。(中略)されば個々人の善悪を論ずるときには、必ずその前に社会の責任、社会の罪という意識にたなくてはならない。」と説明されている。

この『社会の罪』的思想は、前年思軒が訳した『クラウド』の中にもみえていたが、すでに『クラウド』を読みその手法を自家薬籠中のものとしていた鏡花が、今度は思想的摂取をしたであらうことは想像に難くない。

明治という新しい時代は、それが完成されればされる程社会は膨大となり、それ故に冷酷さを増して個人の意志とは無関係に廻転していく。八田巡査はその社会に支配されおどらされている人間の一人であった。そして遂に彼は新しい社会機構にすりつぶされてしまうのである。即ち、「歴史と社会とが濺がざるの涙を濺ぐは亦た小説家の一徳にあらざる乎今の小説家其此に意有るもの無き乎」は、思軒の随筆『社会の罪』の結尾であった。鏡花はそれにこたえて『夜行巡査』で「此に意有るもの」と名乗りをあげ、主人公八田に「歴史と社会とが濺がざるの涙」を濺いだのである。

この思軒の呼びかけに応とこたえ得たことは、鏡花の少年時代よりの思軒愛読が大きく作用していると思う。

第二は構想においてである。

鏡花は社会の罪を描くために、八田巡査をして我身の死をかえりみず自らの義務を果たして他人を助けるといふように仕組んだ

が、この構想は思軒訳の『懐旧』にみる事ができる。

『懐旧』一篇の主題は残忍非道に対する抗議である。そのため「余は吾が義務を果たすに猶務することを得べからず」と死の危険をおかしてまでも相手の命を救おうとするいくつかの事件が、スリルをもって描かれて小説的興味は津々として尽きない。例えば主人公杜伯寧は次のように言っている。

余は自在なり余は多福なり而して猶ほ余は將に死に就かんとす余は極楽に入る只だ一步の所に来れり而して一片闇中の義理は余を強いて却行し反りて死の路に転入せしめぬ噫嘻嗚呼

鏡花は『懐旧』に語られた一つ一つの事件に興味を持ったと同時に、こういう悲壮なる正義感にも深く感じ自らの創作欲を刺激されたのであらう。

何故ならば、死をもって人を助けようという構想は『夜行巡査』より早く『他人の妻』（明治二十六年作。のち『怪語』と改題）にあらわれているからである。学生上杉は上京の途中一人の旅僧に出会い、死を予言され、ひき返すようにすすめられる。しかし上杉はそれをふりきりなおも行くうちに、今は他人の妻となっている意中の人が悪漢に狙われていることを知り、「幾百の兇賊皆我が死敵、然り正に前途に死あらん」と思いつつも、決然一死以って恋人を守ろうと覚悟をきめる、というものである。

これは今見ることのできる作品が完全なものでなく、又鏡花の力量も及ばなかったため、『懐旧』のような強烈な印象は受けない。しかし鏡花のめざしていたところは、『懐旧』のそれと同様

なものであったのではなからうか。

これが『夜行巡査』においては、主人公八田巡査が殺してもあきたりないような男を助けるために死ぬというような、単純だが異常な事件をとりあつたこと、又八田を職務の前には血の道はぬ機械のような極端な人物にしたことなどのために読者に訴える力は強く、作者の意図は達せられている。

そして、この人物こそが第三の影響点である。

八田のような人物は『夜行巡査』が最初ではない。村松定孝氏が指摘されているように『他人の妻』にすでに登場する、職分としてみだりに私情を交えることをいさぎよくとしない新田という警官がそれである。鏡花は新田を評して、作中で「実に洋刀（やうとう）を提げて母の胎内を出た人だ」と言っているが、それは新田巡査一人ではなく、八田巡査も然りであった。しかも最も成功したものであった。故に八田的な警官像は鏡花の胸中に以前からあったものなのである。では鏡花にこのような人間の形を作らしめた源泉は何であろうか。明治時代の警官には士族が多かったから或いは実際にそのような警官を知っていたのかも知れない。しかし私は思軒（しけん）訳『随見録』の一節に登場する一警部を連想するのである。

その『随見録』は、明治二十一年七月二十月発行の『国民之友』に載った分のもので、思軒が前書で述べているところによれば、内容は『レ・ミゼラブル』中のコゼットの母フアンティーヌが街娼をしていた時のある雲の夜、男達から雪を投げつけられ、かえって無実の罪で警官に捕えられた事件のモデルになった実録とのことであるが、この中で、『レ・ミゼラブル』の警視ジャー

ベルと同じ役をはたす一人の警官の言動は、勿論ジャーベルには比すべくもないが、職務の前には有名なユーゴーたりとも私情を交えぬといった、かなり杓子定規に物事を考える融道のきかぬ人物としての印象をうける。それ故に、『随見録』中の警官も亦「洋刀を提げて母の胎内を出た」的の人間というべきであり、八田の面影の源流はこの辺ではないかと思う。すでに述べた如く、鏡花は『夜行巡査』執筆に際し、文体に思軒を模倣したことを彼自身認めていたが、私は文体のみならず以上の三点をも思軒文に求める可能性を考えたい。

さて田岡嶺雲の推称によって得た『夜行巡査』『外科室』での文壇的成巧に、鏡花はまず驚いたと思われる。以前から親しんでいた思軒文への感激を自分も小説にしてみたり、或は植物園で実際に会った美女への思い出を一篇の純情恋愛小説に、これも思軒調で書いたつもりでいたところが思いもかけぬ面に讃辭を受けたからである。が、その讃辭が鏡花の真の意図からそれた面のものであったにせよ、当時の彼にしてみれば、さぞ奮起し、好機来れりの感を持ったことであろう。この成功も思軒を模倣したからであった。あのように思軒を使えばこのような称讃が得られる。

——そこで鏡花は今度は意護的に思軒の、それも特に社会の罪の思想を表面に強く押出して所謂観念小説を書くようになったのである。嶺雲の讃辭にあった、奇警なる着眼をし旧思想の窠臼を出た作をつくって、更らに小説界に一生面を開くために。

そこで鏡花の観念小説は、最も思軒の力が働いて書かれたといえるのである。その主なるものとして『海城発電』（明治二十九

年)、『琵琶伝』(同)、『化銀杏』(同)、『ねむり看守』(同三十年)などがあげられよう。

では、どのように社会の罪の思想があらわれているのか。『ねむり看守』では二つの点が注目される。第一は、鏡花は思軒の随筆『社会の罪』から直接に影響されたというよりも、その思想の母胎の一つである『クラウド』に触発されて書いたと考えられる点である。私はそれを登場人物の類似にみる。又、両作品の主張の同一なところにもみる。鏡花としては原型があったために書きやすかったのであろう。彼の他の観念小説よりは自然な感じがある。『クラウド』は主人公の名でもあって、貧しい彼は遂に妻子のために盗みをして懲役となったのであるが、『ねむり看守』で、看守が囚人達に話して聞かす一組の夫婦も同じ境遇にあった。彼等は秋雨降る夕、借家を追われて路頭に迷う。そして男は子供のためにたった一本の牛乳を盗んでつかまり、彼も亦懲役となったのである。この男もクラウドも、それは「唯正直一方で、あくせく仕事をしている」人間であった。故にクラウドについて述べられている「一個の敏明至深の人物なり、而して悪境界の中に入れられたるが為め染は遂に盗となれり。」(思軒訳)ということとは、『ねむり看守』の場合にも言えることである。そこでやはり『クラウド』と同様に、「余輩が実に責むべきは渠にある歟將た我々にある歟」という疑問が起ってくる。社会においてヒューマンズの欠乏はなかったらうかとの問題が提出されるのである。鏡花はここにおいて社会の罪の思想に立脚した。そして言外になされたそれへの解答は、実に明瞭である。

第二は、鏡花が『クラウド』を読んでその看守に義憤を感じ、それへの抗議として書かれたとみなすことができる点である。

『クラウド』の看守は冷酷な男で、遂にそのため殺されてしまうのであるが、『ねむり看守』は、囚人が作業をしている間それを監視する役にもかかわらず、いつも居眠りをしているという好人物である。『クラウド』のそれとは正反對な看守。あまりにもその対比が鮮かなために、私は『クラウド』を読んだ鏡花がその看守の非道さに対して自分ならこうすると、居眠りをする看守を創作したのではないかと考える。若き鏡花のヒューマンズムの発現であらう。

三

以上、私は鏡花の文学に及ぼした思軒の影響を考察してきた。くり返せば、それはまづ文体次ぎにユーゴーの烈々たるヒューマンズムの思軒の発現である社会の罪の思想であった。さて、ここでもう一つ考察せねばならないことがある。即ち、思想を借り来った鏡花は、文体などの場合のように見事にそれを消化することができたであらうか。私はその結論を導くために、さきに名前を記すのみであった観念小説『海城発電』を改めてみようと思う。

『海城発電』の看護員は『夜行巡査』の八田と同型の人間である。冷酷なまでに職務に忠実な彼は、八田がそのため我が身を死に追いやるかわりに、病身の恋人を死に至らしめて彼の職責を果たした。彼も亦「洋刀を提げて母の胎内を出た」的な男である。そしてこういった人間の原型として、私はすでに思軒訳『随見録』

中の警官をあげておいた。

その看護員が大勢の人夫たちにより詰問される場面は、その最高潮に彼の恋人の死まで用意された息づまる箇所である。このあたりの人物の動きや雰囲気は、『探偵ユーベル』の終結近くユーベルを取りまいてそのスパイを自白させようとする亡士たちの影絵を思わせる。

即ち、「夥多の人数に取囲まれつゝ、椅子に懸りて卓に向」っている『海城発電』の看護員の置かれた状態は、同じく、「今や室内は追々走せ至れる人々にてむらかれるが渠の身邊には猶ほ若干の隙地を剩せり渠は其テール其の腰掛に唯だ一人にて坐せるなり四五名の亡士は窓のホトリに屹立し渠を看守せり」という渠即ちユーベルのそれに外ならず、ついでユーベルを裁く委員が証拠物件を朗読するあたり、

是等の書類を朗読しはじめたときは満室寂然として少しの声もあらず然れども漸やく読で漸やく進むに随ひ漸やくブツブツの声興り（中略）忍音のブツブツの声次第に耳聞く可くなり「ア、悪漢、兇漢、如何なれば我々は直ちに此の曲者を屠らざるぞ」

此の紛擾の声激し起れる中に於て朗読者は止むを得ず更に其声を高くせり

そして、それでもなお且つ黙したるまゝ坐せるユーベル。

幾多の人々は腰掛の上に躍りあがり幾多の拳はユーベルに向て揮ひ挙げり満室ただ激憤と悲憤とにて発狂せり恐ろしき一種の光一同の眼に灼せり

聞こゆる声は唯だ「悪漢」、「ア、劣絶のユーベル」、「ア、おのれセルサレム町の逆賊」

は、『海城発電』においては、看護員からうばった清国よりの感謝状をわざと両手に高くかざして、「声を殺し、鳴を静め、固唾を飲みて群りたる、多数の軍夫に掲げ示」す百人長と、百人長のアジ的罵倒に、

満堂忽ち黙を破りて、哄と諸声をぞ立てたりける、喧嘩名状すべからず。国賊、逆徒、売国奴、殺せ、撲れと、衆口一斉熱罵呵喝を極めたる、思ひ／＼の叫声は、雑音意味も無き響となりて、騒然としてかまびすしく、あはや身の上ぞと見る眼危き、唯単身なる看護員は、冷々然として椅子に凭りつ。という情景となる。

又、看護員に対する人夫たちの罵り、

「撲ちまへ！」

と呼はるものあり。

「隊長、おい、魂を据えて返答しろよ、へむ、何うするか見やあがれ。」

「腰拔め、ロイきくが最後だぞ。」

と口々にまたひしめきつ。四五名の足のばた／＼と床板を踏み鳴す音ぞ聞えたる。

は、ユーベルに対する亡士たちの、

「死」、「死」と呼はる声一斉に起れり、（略）少年は更に語を續き「我々は渠をして逃れしめざるやう渠を執らわべし」一人は呼はれり「渠を將てセアヌの流に投ぜよ」（略）既に

して復た人々は呼はれり「探偵を海に投せよ其の頸辺に石を釣して」

という怒りと相通するものを感じさせるのである。

描かれたものが卑劣な探偵と立派な看護員という違いはあるが、上記の如く、取りかこまれて沈黙するユーベルと看護員、周囲から指弾する亡士と人夫、私は両場面に偶然以上の類似性を含み、思軒訳『探偵ユーベル』からの摂取を考えたい。

さて『海城発電』は、主人公にそのような「洋刀を提げて母の胎内を出た男」を登場させ、愛国心と赤十字精神との相剋をテーマにしたため、かなり強烈に読者に訴える力を持っている。人物、場面とも一応の迫真性を認めてもよからう。しかし思想的には、病気の少女をただ暴漢のなすがままに任せて殺し、それに対して看護員はなんらすることもなくその場を去る一条から、折角の看護員のヒューマニズムも実に薄弱なものであり、これが同時に文学的欠点ともなっており、要するに『海城発電』は一読して驚嘆、再読して疑問を生ずる作品である。

なお、一部始終を傍観しているロンドン、アワリーテレグラフ通信員じょんべるとんの名前は、『盲目使者』で活躍する仏人新聞記者徐夫と英人ロンドンデーリーテレグラフ社通信員武良温の二人の名を連想させるが、これは無関係であろう。

さて、以上のような思想的面における破綻によって生じた文学的欠陥は、ひとり『海城発電』のみならず、実は『琵琶伝』や『化銀杏』などにも認めることができる。『琵琶伝』のお通は、外に愛人がいるため機会さえあれば何時でも節操を破ると良人に

公言した。そのような、自己に忠実たらんとする強い女性が、何故人形のように「遺言」に従って「許嫁」のもとへ行つたのであろうか。彼女には、勿論恋人との生活を前提とした他の生き方が、いくらでも可能なはずである。思うに鏡花は、思軒の社会の罪思想を借り来つてその主張に急なるあまり、ただ社会の罪の犠牲になつた男女の悲惨な結末にのみはじめから目を向けていたからであらう。故に重要な女主人公を、筋の進行上矛盾する性格にしてしまい、それが致命傷となつて社会の罪を描いたやうで描き得ず、『琵琶伝』は作者鏡花のひとり合点となつた感がある。そのため読者は、この作品の持つ思想的な面、即ち鏡花が何よりも描きたかつたであらう社会の罪の主張よりも、その犠牲を強調するために設けた結末の、あたかもドラキュラ映画にでもありそうな、血みどろな場面にのみ印象づけられてしまふであらう。それも実は、鏡花文学の一つの特色ではあるのだが。……

『化銀杏』での失敗は、敵役たるお貞の良人西岡時彦を善人として描いた点である。これは、単純で直線的な鏡花の觀念小説においては重大なる欠陥であつた。西岡は妻のお貞からも同居させている少年からも非常に忌み嫌われている。何故二人からかくも嫌われなければならないのであろうか。それは、彼が妻に対して実に親切で愛情深いからであつた。又彼が不幸にも少年の姉を虐待した悪亭主に似ているからであつた。ただこれのみで、西岡はその死を願われる程二人から憎まれているのである。読者は、封建的な結婚制度にしいたげられているお貞の苦しみ大いに同情するであらう。が亦同時に、むしろ同情すべきはお貞でなく西岡

の方ではあるまいかとも考えるに違いない。それは、鏡花の伎倆の不足による迫真力の希薄さが大いに原因していようが、いずれにせよ西岡が妻子から嫌われなければならない理由が理解しがたいからである。作者鏡花が、この小説で何を訴えんとしたかにについては容易に推察することができるが、以上のような読者を混乱させる欠陥を持つこの小説は、そのため思軒がものしたあの『社会の罪』一篇の文章には、とうてい感化力、影響力において及ばぬものとなつてしまつた。

しかし、そのように作者の意図からそれた作品であっても、この小説は比較的素直に読ませ一応の水準を保つたものとなつてゐる。何故か。その理由の解明は極めて興味深いものを持つてゐると思う。

結論から言えば、この作品は所謂鏡花調がはのかに見られるのである。これが救いであつた。それは特に女主人公お貞の姿態の描写に認められよう。長火鉢の向うに坐つてゐるお貞は、円髻の鬢が頬に乱れて下占ばかりで帯を占めず、素肌に紺縮の浴衣をまとい、時々つましげに三味線を弾くという、のちの鏡花文学に多く登場するような鏡花好み美人である。そしてこの小説は全篇ほとんど同じ場所でのお貞と彼女をしたらう少年との会話で成り立っているが、その間におけるお貞の動作、話しぶりなどの雰囲気から、読者は小説中にもられてゐる「社会の罪」以上の印象を

強く受けるであらう。

故に滅裂に終るはずであつたこの小説を、そこから救いそればかりか一応の体裁さえとのえさせてゐるのは、実にこの鏡花調の、それが萌芽的なものであつたにせよ認められたためであつた。

私は社会の罪の主張を堂々と揚げたつもりであつた作品に、その第一目的よりもかえつて作者鏡花の予期しなかつた点にこの小説の色も艶もあつたということを注目したい。これは即ち、思軒からの影響が思想的面において失敗したことを意味してはいないだらうか。私はここに鏡花の観念小説作家としての限界を考えるわけである。

註

鏡花の記憶違いと思われる点を指摘したい。彼は『いろ扱ひ』で、『盲目使者』を北陸英和学校在学中に読んだかのように受け取れる話をしてゐるが、正確に言えば同校中退後に彼は読んだのである。即ち、鏡花は同校を明治二十年五月に退き、『盲目使者』は同年九月十六日から連載されている。

たぶん中退後も、可愛がつてくれた女教師のいる学校なので毎日のように遊びに行き、そして『盲目使者』を見つけ愛読したのであらう。